

女子競走部快挙

創部1年目で 杜の都駅伝出場

石巻専修大学

<http://www.senshu-u.ac.jp/isinomaki/>

創部1年目で杜の都駅伝へ―女子競走部が9月23日、岩手県北上総合運動公園陸上競技場で行われた第33回全日本大学女子駅伝対校選手権大会(杜の都駅伝)10月25日(仙台市)の東北地区予選会に出場。1時間47分59秒99(5000m×6人の合計タイム)で2位となり、出場を決めた。予選会には東北4県から、オープン参加4校を含む10校が出場。3年ぶりに2校となった本戦出場枠を争った。

代表電話番号
**0225
(22)7711**
広報専用FAX
**0225
(22)7809**

女子競走部は、部員7人のうち1人をけがで欠く厳しい状況でレースを迎えたが、川崎美祈さんが自己ベストを更新する走りを見せ、17分26秒09でチームトップとなる総合7位でゴール。漆戸雛さんが8位、原田詠麻さんが11位と続くなど、全員が力を出し切った。

【本戦登録選手】

▽寺牛若菜さん(経営1・埼玉県飯能高)
▽原田詠麻さん(経営1・静岡県静岡北高)
▽牧野あやさん(経営1・岩手県北上翔南高)
▽漆戸雛さん(人間1・青森県八戸学院光星高)
▽川崎美祈さん(人間1・山形県山形城北高)
▽高橋七海さん(人間1・山形県九里学園高)
▽千葉悠里奈さん(人間1・宮城県常盤木学園高)

専大生田キャンパスで特別研修



▲ 植村教授の問いかけに学生たちは積極的に発言

人間文化学科 1年次生17人

電子書籍を通して激しい時代の変化を考え、博物館の展示から歴史と向き合う姿勢を感じ取る―。人間学部人間文化学科の特別研修が9月6日から8日まで専修大学生田キャンパス(神奈川県川崎市)で行われ、1年

式部 全国大会出場かけ 硬野 地区代表決定戦へ

秋季リーグ戦惜しくも2位
硬式野球部が南東北大学秋季リーグ戦で2位となり、全国大会である明治神宮野球大会の出場権をかけた東北地区大学野球代表決定戦に挑む。同リーグ戦は7勝3敗

で東日本国際大学と勝率で並び、10月11日に行われた優勝決定戦に臨んだが惜しくも0-3で敗れ、10季ぶりの優勝を逃した。

今季は只野善昭(経営3・宮城県柴田高)、押野弘嗣(経営1・山形県天童高)を中心にチーム

防御率1.74と、投手陣が抜群の安定感を発揮した。

野手では、3割4分3厘の高打率をマークした小野侑宏(経営2・宮城県聖和学園高)が優秀選手を受賞。ベストナインには二塁手の小野と、指名打者の内海航(経営3・宮城県東北高)が選出された。

酒井健志監督は「リーグ戦では1試合ごとに成長を期する硬式野球部の活躍に期待だ」。

学生5人が訪問 米・メーコン大と交流

米・メーコン大と交流

東日本大震災の石巻で命を落としたティラー・アンダーソンさんの母校ランドルフ・メーコン大学(米国バーミンガム州)を、5人の学生が初めて訪問した。関口駿輔経営学部准教授に引率された派遣学生たちは9月6日から18日まで米国に滞在し、同大やバーミンガム・モンウェルズ大学で講義や交流イベントに参加。ランドルフ・メーコン大

学では教員や学生を前に、日米の自然災害の違いと水産業の復興・復興に向けた補助金政策の効果について、英語でプレゼンテーションを行った。

同事業は「ティラー・アンダーソン記念基金」の支援を受け、災害研究を主要なテーマに、学生の相互派遣を行うもの。

今回の訪問では、7月に来学したランドルフ・メーコン大学の学生と再会。また、同基金を設立したアンダーソン夫妻にも温かく迎えられ、生前のティラーさんへの思い、日米友好の意義を改めて認識した。

及川秀真さん(理工2・宮城県気仙沼高)は「ティラーさんの遺志を継ぎ、将来は日米の懸け橋になりたいという思いで参加した。言葉の通じない環境で苦労したが、自分の意思を伝えるスキルが徐々に身につく、成長を実感することができた」と振り返った。

10月6日には、学生会主催の壮行会が行われた。大一番に臨む女子競走部を坂田隆学長が激励。学生の代表から部員たちに花束が贈呈された。キャプテンの原田さんが「一致団結して、一つでも上の順位でたすきをつなげるよう、力いっ

て、張り切ってレースに臨みたい」と語った。

10月11日に行われた「がんばろう東北! 松島ハーフマラソン大会」の10歳女子A(39歳以下)に川崎美祈さんが出場。雨の中を快走し、36分45秒で1位となった。

次生17人が実りある2泊3日を過ごした。昨年に続き2回目。7日には文学部人文・ジャ

ーナリズム学科の植村八潮教授(出版学)と、人間科学部社会学科の嶋根克己教授(社会学)の特別講義に臨んだ。

電子書籍の普及に携わる植村教授は「本」の未来を解説。「10年後の米国の大学生の65%は、今は存在していない職業に就く」という米研究者の予測を紹介し「新しいことに取り組むセンスを鍛えよう」と励ました。

戦争にかかわる博物館の展示を取り上げた嶋根教授は第二次大戦中、ユダヤ人をドイツに移した事実をフランスが歴史に刻もうと努めていることを「一残そうと強く意識しなければ記憶は散散してしまう」と解説した。

学生は真剣に聞き入り、「点字は電子書籍が普及するとうなるのか」と質問し、意見を発表していた。鹿野茜さん(宮城県聖ウルスラ学院英智高)は「新しい視点で考えるきっかけになった」と目を輝かせていた。

講義終了後、佐藤ゆりかさん(宮城県石巻商業高)、金子由芽さん(宮城県不登校児童の支援活動をしている奈良さんは「子どもの心の問題が東京では知られていない。伝えていかなければ」と決意を新たにしていた。

最終日には専大相撲部を訪問し、迫力ある稽古と特製キムチちゃんこに歓声を上げた。



▲ 境港市での試験販売

PO法人「元気みなと」と連携し「カニだしラーメン」を開発した。9月11、12日には境港市で、同17、21日には東京都内で家庭用チルド商品(2

食入り税込み500円)の試験販売が行われ、ゼミ生も駆け付けて販売やPRに努めた。連日完売と好評だった。

石原ゼミがこれまでに開発した「サバだしラーメン」は累計15万食(2015年6月まで)を売り上げる人気商品になっています。境港がカニの水揚げ日本一であることから、活用されていなかったベニズワイガニのゆで汁に着目。ゆで汁エキスを使ったしょうゆベース